

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	樺沢 麻美
論文題目	Study on the Historical Background and Current Functions of Chimpanzee Sanctuaries （チンパンジー・サンクチュアリの歴史的背景と現在の意義に関する研究）		
（論文内容の要旨）			
本論文は、野生チンパンジーを先進国の医療研究や娯楽・ペット市場へ輸出する歴史的に重要な起点であったシエラレオネにおいて、没収されたチンパンジーを収容・飼育する「サンクチュアリ」という施設に焦点をあて、先進国のチンパンジー観の歴史的変遷がチンパンジー生息国に与えてきた影響、サンクチュアリという施設が生まれた経緯と社会的背景、サンクチュアリが果たし得る今日的機能・役割について明らかにし、アフリカ諸国における保全政策の問題点と将来像について検討したものである。 アフリカー欧米間で行われてきたチンパンジー取引の歴史的背景を確認するため、西欧史において、アフリカ熱帯地域に生息するチンパンジーが、どのように受容されてきたかを概観した。17 世紀にチンパンジーが初めて欧州に持ち込まれて以降、人に似た不気味な化け物という初期イメージから、19 世紀中頃から動物園の発展に従い「珍獣」であるチンパンジー展示が増加した。20 世紀前半には、訓練された個体がサーカスなどの娯楽媒体に登場し、富裕層のペットとしても扱われた。また、ヒトとの生理学上の類似性により医療実験動物としての需要が高まり、大量のチンパンジーが先進国に輸入された。野生由来の個体の多くは西アフリカ、とくにシエラレオネから輸出されたことが、当時の輸出国であるシエラレオネと輸入国のアメリカ、日本、ヨーロッパの記録により明らかになった。1960 年代からの 20 年間に、少なくとも 4000 個体が取引されたと推定され、その捕獲が野生個体群に与えた影響は甚大であると推測される。 1990 年代の先進国では、動物の福祉の観点から、チンパンジーは「ヒトに近い動物」としてその福祉や「権利」が議論されるようになっていく。1975 年に発効したワシントン条約により、国際的取引が禁止された生息国においては、在留外国人を主たる対象としたペット取引問題が新たに登場した。取締りにより没収されたチンパンジーは、「余剰」個体として行き場所を失い、その結果、それらの個体を引き取り飼育する「サンクチュアリ」という施設がアフリカ各地で、主として先進国の人々によって設立された。「動物の福祉」という思想の下に生まれたサンクチュアリは現在、生息地の保全にも活動を広げようとしている。			

シエラレオネでは、1995年にタクガマ・チンパンジー・サンクチュアリが設立され、ペット問題や野生群保全活動に取り組んできた。人に飼い慣らされたチンパンジーを自然に近い状態で飼育し、より適切な生息環境下に再導入が可能な状態に（再）訓練することを目的としている。また、市民による見学活動を受入れ、環境教育を行っている。2006年4月に起きたチンパンジーの脱走事件の経緯から、森林保護区内に逃走したチンパンジーが、野生個体に似た行動をとっていたことが示唆され、皮肉な形ではあったが、サンクチュアリにおける訓練の有効性を確認することになった。

サンクチュアリの記録分析から、シエラレオネでのペット問題の原因は、一般に信じられているブッシュミート問題の副産物なのではなく、同国で集中的に行われてきたチンパンジー捕獲の歴史にあることが推察された。また、ワシントン条約発効後も、現地に住む外国人が「買い手」としての役割を引き継いでいる。

さまざまな立場、年齢層の人々に対するインタビューから、シエラレオネの人々はチンパンジーに対して、多様な価値観を持っていることが分かった。呪術的な意味から「邪悪な動物」として恐れられる一方、食習慣については、宗教的、民族的な違いだけでなく、集団・個人の経験にも影響を受けているようである。先進国由来のチンパンジー観も大きな影響を与えている。

本研究により、絶滅危惧種の保全という現代的・応用的問題の背景に、数世紀にわたる歴史的経験や、欧米から流入する思想的影響といった要因が横たわっていることが明らかになった。生息国における「余剰個体」をなくし、生息地の保全をすすめるためには、生態学的現状の理解のみでは不十分であり、多様な人々のチンパンジー観を形成してきた歴史的・社会的要因の分析・理解が不可欠である。

(論文審査の結果の要旨)

人にもっとも近縁な動物種であるチンパンジーは、現代社会において特殊で多義的な存在である。アフリカ熱帯地域に生息する野生個体群は絶滅を危惧されており、密猟や違法売買の取り締まりによって没収されたチンパンジーを引き取り飼育する「サンクチュアリ」と呼ばれる施設が、多くのアフリカ諸国に設立されている。本論文は、このサンクチュアリに注目し、人がチンパンジーに対して向けてきたまなざしの歴史的変遷を丹念に追うとともに、シエラレオネにおいて現在行われている保全活動のさまざまな矛盾や問題点を、歴史的視点から大胆に再解釈している。

本論文はまず、チンパンジー生息国においてサンクチュアリが必要とされるようになるまでには、複雑に入り組んだ歴史的背景があることを明らかにする。17世紀にチンパンジーが初めて欧州に持ち込まれて以降、「化け物」、「珍獣」といった認識から、進化論による「ヒトの祖先」像が登場するなど、近代世界におけるチンパンジー観は激しく変化していった。それと平行して、動物園への導入やペット需要、実験動物としての大規模な需要が次々に発生した。シエラレオネ、とくに貿易都市としてのフリータウンは、欧米などの先進地域へのチンパンジー輸出の重要な拠点として一貫して機能していた。本論文には、20世紀前半に活躍した動物商の記録や自伝などを参照することにより、統計資料の利用できない植民地期の取引の様子が詳述されている。また、第二次大戦後に関して、輸出国側であるシエラレオネおよび、米欧日といった輸入国側の資料を丹念に対照させることによって、主として実験動物としてのチンパンジー取引の規模や、野生個体群への甚大な負の影響が試算されている。これまでは断片的な記述が散見されるのみであったチンパンジー取引の全容を、本研究はフリータウンという輸出の拠点に注目することで総合的に論じ得たものとして、高く評価できる。

絶滅のおそれのある野生動植物の国際取引を禁じたワシントン条約が1975年に発効したことにより、チンパンジーの国際取引は全面的に禁止されることになった。このため、シエラレオネのような供給国では、既存の交易ネットワークの出口がふさがれ、余剰となった孤児が国内市場に出回ることになった。また、先進諸国ではチンパンジーを医学実験に使用することへの反発が高まり、実験用に飼育・繁殖されてきた個体が余剰化する事態が生じた。このような、生息国、消費国双方に生じた異なる事情によって、結果として、双方に行き所のない余剰個体が大量に生じることになり、サンクチュアリと呼ばれる施設の必要性が高まったことが論証されている。疾病感染の可能性による野生復帰事業の行き詰まりや、環境倫理思想の浸透による安楽死処分への強い批判と

いう背景によって、これら個体の「出口」はさらに狭まりつつある。サンクチュアリが、このような非常に多様な現代的問題群の結節点に位置していることを、本論文は詳細に論じている。

生息地におけるサンクチュアリは、外国人の主導により、国際的な潮流を反映しながらその活動規模を広げてきた。しかしながら、生息地保全や住民の貧困対策といった、国際的に優先順位の高い問題に比べ、サンクチュアリの活動についての地域の人々の関心や関与は低かったと言わざるを得ない。本論文は、シエラレオネのタクガマ・チンパンジー・サンクチュアリに引き取られる個体の履歴や持ち主の属性、捕獲場所の推定、さらには、首都フリータウンに隣接する同サンクチュアリからのチンパンジー脱走事件の詳細な顛末や近隣住民の反応などを記述することで、外来のトップダウン的活動が、どのように地域住民の生活と関連を持ち、地域の社会的文脈に埋め込まれているかを論じようと試みている。現時点で明確な将来像の提示に成功しているわけではないが、さまざまな立場の人々へのインタビューから、チンパンジーに対する伝統的・呪術的認識の影響力や、科学的視点の内面化、シエラレオネ人自身の歴史である奴隷解放とディアスポラといった経験との類似の認識など、将来の保全活動のありかたを考える上で無視できない、シエラレオネ的なチンパンジー観が浮かび上がった。サンクチュアリを含めた保全活動の将来は、本論文が明らかにしたこれらの在来動物観に基盤を持つべきであるという主張は傾聴に値する。

以上のように、本論文は本研究科の研究成果としてふさわしい内容を備えた、優秀な論文であると判断できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 21 年 1 月 27 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降